

仔魚の餌料摂餌状況をみると全長が2.35~2.45 mmではD型幼生を多く摂餌しているが、その後は減少して全長2.4~2.5 mmになるとS型ワムシへ移行している。2.7~2.8 mm程度になるとD型幼生はなくなり、S型ワムシだけを選択摂餌するようになる。その中間に摂餌されているのがチビワムシの一種でこの大きさが背甲長60~120 μ の範囲であるがD型幼生とほぼ大きさが似かよっているため、全長2.2~2.3 mmでも摂餌されている。このようにチビワムシの一種が初期餌料として最適な大きさであるがワムシ培養中に発生してわずかに採取され、しかも底生性のようであり利用しにくい欠点がある。今後、浮遊性でしかも大量増殖培養が可能な種類を開発することが必要であると思われる。

Ⅲ ハマフエフキ中間育成試験

材料と方法

石垣島、八重山支場から沖縄本島に、昭和56年8月13日に平均尾叉長5.6 cmのハマフエフキ、323尾を航空輸送し、図-2に示す糸満沖に設置した網生簀に收容した。生簀收容直後は動きも鈍く、若干活力の低下を感じられたが、收容後30分から1時間程度で、生簀内を活発に遊泳するようになった。生簀網は目合3 mmのモジ網で、1辺が4 mの立方体である。

餌はマダイ用配合飼料に、ビタミン添加オイルと海水を混ぜ、ねり餌にして、1日1回魚体重の30%を目安に与えた。

8月27日に台風18号が発生し、接近する恐れが生じたため、屋内3 t水槽に移し、1~2回転/時程度の換水状態で飼育を続けた。9月7日に再び八重山支場から平均尾叉長6.0 cmのハマフエフキ、464尾を航空輸送し、屋内3 t水槽で飼育した。陸上水槽での投餌は1日2回マダイ用配合飼料にビタミン添加オイルを混ぜ飽食するまで行なった。飼育は9月17日で一部を残して打ち切り、ハマフエフキは別の試験に使用した。

結 果

飼育期間中の生残率は、網生簀での飼育期間中は100%、陸上水槽での飼育は、水槽外へ飛び出て斃死した数尾を除くと100%であった。

飼育期間中の尾叉長組成と、昭和55年に八重山支場が網生簀で飼育したハマフエフキ稚魚の成長を図3に示す。10月の資料は、陸上水槽で飼育を継続した22尾についてのものである。8月から10月までの成長は、八重山支場の飼育結果と比べてかなり劣っている。これは飼育条件（環境、飼料等）によるものと思われる。

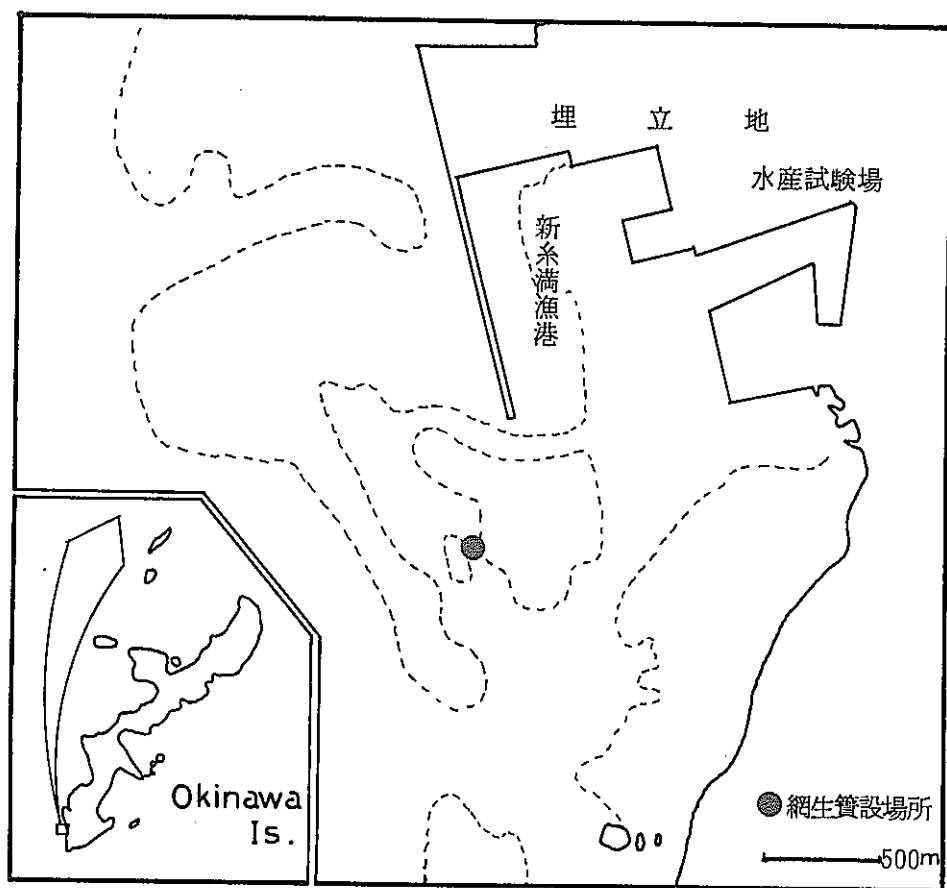


図 2. 網生簀設置場所

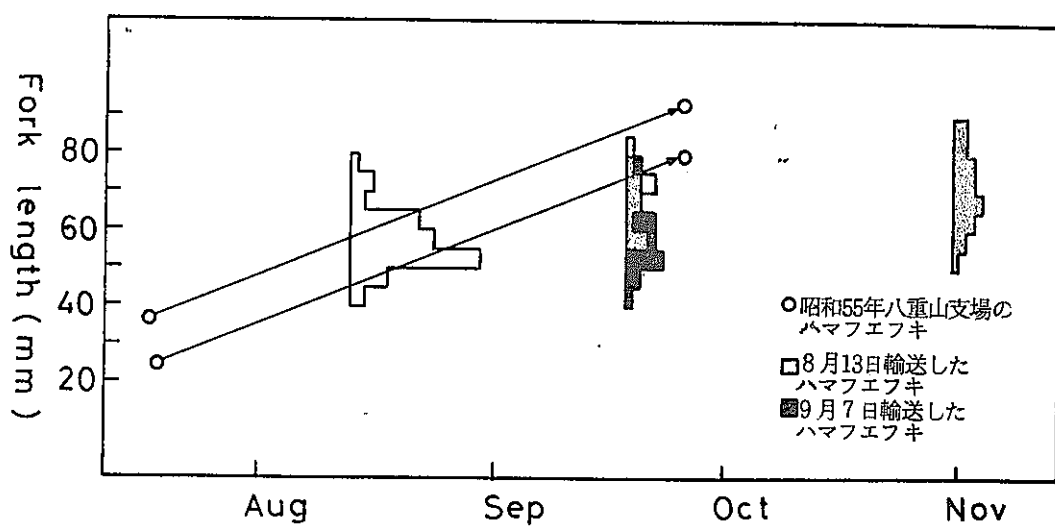


図 3. ハマフエフキの尾叉長組成